

思
考
の
隅
景

宮瀬龍門(1719-71)といっても、今では知る人も少ない。蘭学者、杉田玄白(1733-1817)や詩人、六如(1734-1801)の漢学の師匠だった彼は、明和元年(1764)に訪れた朝鮮通信使の一行を応接し、『東槎余談』という手書きの詳細な筆録を残している(東北大学図書館蔵)。対馬での面会の際に、龍門は自己紹介して「僕姓劉名維翰字文翼號龍門」と名乗りを挙げている。維翰とあるのは、順宗四十四年(1718)に「関白源吉宗」(八代將軍徳川吉宗)即位にともない来日した朝鮮通信使節に製造官として随行した文人、申維翰(ShinYu-han:1681-1752)に肖[あやか]ったものか、とは安東大学の李鐘虎教授の推測。麻子の出ゆえか、身分は低かったが文才で名をなした申維翰。その来日の年に生誕した龍門は縁を感じたのだろう。

その申維翰には261日におよぶ行程を綴った『海游録』がある。雨森芳洲(1668-1755)や松浦霞沼(1676-1728)に伴われて対馬から豊岐を経由して藍島(相ノ島)に至るや、申維翰は詩想を得て、こんな漢詩を作る。「吾今爽然自失、不知身外有何物、若使百年三萬六千日、長得浮生坐此間、便足羽化登仙」。李鐘虎教授はこれを独創的な詩と評価されるが、どうだろうか。むしろ東海中に仙人の棲む島があるとの詩的定型を異国の風物に当て嵌めた、紋切り型で陳腐な意匠ではあるまいか。とはいえ瀬戸内海に入ると、使節が風光をこよなく愛でたのは、周知の事実。長門の赤間を過ぎ、蒲刈島を経由した、福山の瀬ノ浦では、福善寺に宿泊する。その後荒廃した使館が、改めて対潮楼と命名されるのは32年後だが、そこから臨む島の名を仙酔島という。あるいは日本の島々に仙境を見る、韓人の詩的趣向に肖った命名ではなかったか。

大阪に至った一行は、書籍の出版が盛んなことに驚きを隠さない。「古今の異書、百家の文集にして書肆で刊行されたものは、我が国に比べて十倍どころではない」(養在彦訳『東洋文庫』版による)。とりわけ



第12回日韓美学研究会(2004年8月6—11日)より
朝鮮通信使余話

儒者として著名な李退溪(1501-70)を倭人が「尊尚」する様に、目を瞠[みは]る。自国の出版物が、東海上の島国で、知らぬ間に倭刻本(あるいは海賊版)として流通していた様に驚くのは、これより瀋末の外交官・詩人、黃遵憲にまで連綿と続く定型の逸話。舶来文化への旺盛な好奇心と、豊富な出版が、日本文化を特徴づけていた。新井白石の文業を高く評価しつつも「語に卑弱なところがある」とする崔島大の評価。それを引用する申維翰も、日本人の「人才」の限界を、風土が政治の為かと推測する。松浦霞沼の詩を称賛した申の評語(「婉朗有中華人風調」)からも知られるように、中国の規模への近さが、評師の規準となる時代だった。ここに高橋博巳、金城学院大学教授は「東アジアの文芸共和国」の実相を見る。そして黄遵憲が目にしたその崩壊の兆しが、近代と呼ばれる時代の幕開けを告げる。

このほど第12回日韓美学研究会では、通信使経由地の広島県下蒲刈[しもかまがり]島にある蘭島文化振興財団・松濤館を訪れ、韓日交流の事績を検討した。蒲刈島での接待は、通信使一行より「御馳走一番」との評価を得た。その供給料理は、儀礼用の七五三の膳と、実際の三汁十五菜よりなる。ここで素人の疑問。朝鮮の儒教の礼に則れば、法事の料理は左右対称に、易経の陰陽五行の説に従って配膳されるのではないか。果たして使節たちは、日本で出された奇数構成の反儒教的料理を、礼を知らぬ野蛮で倭臭芬々たる食事として、忌避することはなかったのか。だがこれは愚問の様子。肉抜きで銘々膳に盛られる東海の魚類責めは、先方も先刻承知のうえ、覚悟のうえ。朝鮮側では宮廷料理以外では配列無視の全品羅列が普通だったらしい。

* 標記の研究会は広島大学・グリーンピア安浦・呉市下蒲刈島にて開催された。参加を要請された青木孝夫、浜下昌宏、岡田桓教授をはじめ、韓日、日韓の諸先生、学生諸氏に謝意を表します。

国際日本文化研究センター1研究員
総合研究大学院大学助教 稲賀徹介